

からどんどんライかん者が集まってきました。

草津は、山また山の中で、汽車からおりると、一步一步歩いて行かなければならず、女の足では、とても苦痛です。ケサは、ライかん者のいる湯の沢まで四十キロの道をまっしぐらに歩きつづけました。



「わたしは、まんぞくな医
りようしせつもないところ
で、どのくらいみんな
のためにしてあげられる
かしら。」

と弱気になりました。そんなとき、ふと顔をあげると、いつの間にか浅間山あさまさんが目のまえに見えました。